コロナ禍からの学び

佐伯　宣久（人体の構造と機能・疾病論・微生物と免疫・専門教養）

教育上の課題と工夫

社会的にはコロナ禍は去ったかもしれないが、現在も一定数の感染者は存在し、この感染症の脅威から完全に解放されたとは思えない。また、インフルエンザの流行が令和５年の９月から１０月にかけてみられたが、この流行は毎年くり返されていくことであろう。コロナ禍の中で基本的な感染予防対策や予防接種の重要性が一般の人々に広く認識されたことはよいことであり、学んだことを今後も生かしていくことが重要と考える。

例えば授業では、以前はほとんど考えたこともなかったことであるが、感染の起こりやすい状況を避けることに気を配るようになった。座学の授業ではほぼ 90 分発声し続けていることから、私は現在もマスクを着用するようにしている。自分の感染が判明した際の学生の心理的影響（不安）も考えてのことである。また、以前は授業での座席は学生の自由に任せていたが、学生が密になるのを避けるために座席は指定している。

コロナ禍で得たもう一つのよいことは遠隔会議システムを使うようになったことである。今年度の大学院の授業も全て遠隔で行っており、仕事と学修を両立させなければならない大学院生にとっては、登校する必要がないことから時間を有効に使えるメリットがあるものと考えている。学部教育では今年度も各授業を録画して授業後に学生に配信して視聴できるようにした。また、授業や演習に関する説明を録画して授業前に配信することにより、授業時間を有効に使えるようになっている。ただ、録画を視聴せずに授業に参加する学生もいることから、これを想定して対策は考えておく必要がある。

授業に遠隔会議システムを導入してわかったこととしては、基本的には座学の授業は対面でもオンラインでもよいということである。2022 年度においては可能な授業は全てオンデマンドでの録画視聴の形をとった。教員と学生の双方にとって時間を有効に使えるメリットがあり、学生が個々の生活スタイルに合わせて受講できることもメリットと考えたからである。しかしながら、期末試験の結果がやや悪くなった印象を持ったことと、オンラインでは受講しない学生がいることが課題であるという話を他大学の教員から聞いたことから、2023 年度においては全て対面にて授業することとした。結果としては、前学期の期末試験の成績を見た限りではあるが、2022 年度とほとんど変わらなかった。おそらく対面でもオンラインでも勉強に励む学生は励み、そうでない学生は授業形態とは関係なくあまり気持ちが勉強に向かないということなのであろう。ただ、対面で実施することにより学生の様子や出席状況を把握しやすくなるのはよい点であり、心身面などの問題を持つ学生を早期に発見して対処しやすくなるメリットがあると思う。

コロナ禍の教育活動を振り返って

コロナ禍が教えてくれたことがもう一つある。それは集まることの大切さである。集まることにより、まず互いの安否が確認できる。そして、自分が感じている事や不安を言葉にするきっかけとなる。そして、考えている様々なことについて話す場、またそれに対する複数の他者の意見を聴く場が生まれる。対面での情報伝達と非対面での情報伝達はやはり異なる。また、看護職に協働力は不可欠であると思うが、意見や考え方が違う、自分の考えや気持ちがうまく伝わらない、など様々なストレスに対処しながら、皆で協力して目標を達成するスキルは、集合して作業することなしには身に付かないであろう。